

# オレロップ体育アカデミーでの研修による研究報告

工藤亘 鈴木淳也 河野峻平 小林潤  
宮崎純子 大澤誕也 中村麻衣

玉川学園・玉川大学  
健康・スポーツ科学研究紀要  
第19号

## ■研究報告■

# オレロップ体育アカデミーでの研修による研究報告

工藤亘\*1 鈴木淳也\*1 河野峻平\*2 小林潤\*3 宮崎純子\*3  
大澤誕也\*3 中村麻衣\*4

## 要約

「玉川大学・玉川学園とオレロップ体育アカデミーとの体育教育交流に基づく体操の指導法・補助法及びスポーツに関する指導法の共同研究 - オレロップ体育アカデミーにおける K-16 体育科教員研修を通して -」が承認され、研究①「玉川大学・玉川学園の子どもたちの体力の現状を基にしたオレロップ体育アカデミーでの研修課題の探究」と研究②「フォルケホイスコーレであるオレロップ体育アカデミーとデンマークの教育制度及び教員養成についての研究」について成果を報告する。

## 1. はじめに

平成 29 年度小原國芳教育学術奨励基金にて、研究主題「玉川大学・玉川学園とオレロップ体育アカデミーとの体育教育交流に基づく体操の指導法・補助法及びスポーツに関する指導法の共同研究 - オレロップ体育アカデミーにおける K-16 体育科教員研修を通して -」が承認され、K-16 体育科教員の内、執筆者である 7 名がオレロップ体育アカデミーにて研修を行った。本研究は、その研修を含む研究成果を報告することを目的とする。

## 2. オレロップ体育アカデミーにおける K-16 体育科教員研修

期 間：平成 30 年 3 月 19 日～27 日

場 所：デンマーク王国オレロップ体育アカデミー

参加者：工藤亘（大学）、鈴木淳也（大学）

河野峻平（低学年）、小林潤（中学年）、

宮崎純子（中学年）、大澤誕也（中学年）

中村麻衣（高学年）

研修スケジュール：（文末資料）

## 3. 研究①

「玉川大学・玉川学園の子どもたちの体力の現状を基にしたオレロップ体育アカデミーでの研修課題の探究」

### <目的>

本学の体力テスト結果等を踏まえ、低学年生～大学生までの体力の現状を各部担当者が発達段階による視点で分析し、そこから見える健の教育・体育の課題を基に、オレロップ体育アカデミーでの研修課題を探求することである。

### <低学年>（河野峻平）

玉川学園低学年に所属する 6～9 歳の児童はプレゴールデンエイジと呼ばれ、さまざまな要素の動きを体験することで、多様な脳神経回路が形成される時期にある。このことから、授業においても持久性や強壯性を求めるのではなく、全ての運動の基礎となる巧緻性や調整力の発達に主眼を置いた指導を心がけなければならない。学習指導要領においても「からだづくり」や「からだほぐし」の運動を体育に盛り込むことが提唱されている。このようなプレゴールデンエイジの時期に、デンマーク体操をどのように融合させた体育を行えばよいかについて研究する。

今回の研修は、18～30 歳の体操の授業の参観が主であり、小学校段階の授業に生かす学びを得られるかは不安であったが、年齢に関わらず体育教師が大切にしなければいけないことに気づくことができた。それはどの年齢であっても楽しく、主体的に運動できる環境を整えれば、子ども達は自然と自分から運

\*1 玉川大学教育学部 \*2 玉川学園低学年

\*3 玉川学園中学年 \*4 玉川学園高学年

動を楽しみ始めるということである。今回は施設・設備と音楽の使用の二つに着目する。

デンマークでは、オレロップに限らず、公共の体育施設は設備が充実し、誰もが利用しやすい仕組みができています。これは日本との大きな違いです。公共の施設を見学した時には、小学生の子ども達数名が楽しそうにトランポリンで遊んでいる姿があった。日本であればそこに必ず大人が付き、禁止事項がたくさん書かれた紙に保護者がサインをして初めて使用できるようになる施設だが、デンマークではそれが不要な。

体操の用具で比較すれば、日本の体育館に置かれているマットは、ほとんどの体育施設では昔ながらの白いマットが置かれている。白いマットは準備するだけで大変な労力であり、準備したところでエアトラックのように衝撃吸収効果や跳躍を高くしてくれる反発力は生み出してはくれない。また、自分の習得前の技の練習は痛みの恐怖から挑戦することをためらわせる原因ともなる。今の日本の設備では、体操を行う前から嫌いにさせる要因をつくってしまっていると考えられる。

一方オレロップでは、エアトラック、トランポリン、ピットが常設されていて、子ども達が自由に使用できる環境が整っている。トランポリン、エアトラックは跳んでいるだけで運動量が確保され、空中感覚も身につく。トランポリン、エアトラックの端にはピットがあり、そこに着地さえできれば、頭から落ちて大きな怪我をする恐れはない。怪我の心配、痛みの恐怖がなければ自ら進んで新しい技に挑戦しやすくなると考える。(写真1)



写真1 トランポリン

この日本とデンマークの施設、設備の違いは子ども達にとっては非常に大きな違いである。筆者は日本の体育施設しか知らなかったため、施設や設備にあまり疑問を抱くことはなかった。しかし、今回の研修で、子ども達が自主的に体操に取り組みやすい環境整備がされているかどうかは、子ども達を運動好きにするかどうかにとっても重要だということに気付かされた。日本全体がデンマークのような体育施設をつくっていくのは现阶段では難しいことだと考える。しかし、オレロップの東洋分校である玉川学園が充実した体育施設を建て、日本全体に発信していくことは有意義であると考えます。

二つ目は音楽を活用した指導を取り入れていくことである。日本でも玉川学園で行なっているデンマーク体操のマスゲームやダンスの授業で音楽を使用することはあるが、それ以外の授業で使用することは限定的であると考えます。オレロップの授業では、ダンスやマスゲームのような体操の時間以外でも積極的に音楽を使用していたのである。

例えば、ウォーミングアップの時、かけた音楽にあった動きを教師が前で示し、生徒達も同じように動いていく。内容としては徒手体操の動きやストレッチ、強壯性を高める運動など様々であったが、どれも音楽に合わせて楽しみながら運動していたのが印象的である。日本の準備運動は、自分で行うものも含めて、教師が号令をかける、もしくは児童の代表が前に行うものが多いように考える。

号令に合わせて運動することも必要であるが、音楽に合わせて楽しみながら動くことで、次の運動に体と心両方の準備を整えている様子にとっても好感を持った。今後、規律正しい授業を行いながらも、時に音楽を使用して楽しみながら運動できる授業を実践していきたいと考える。

#### <中学年> (小林潤・大澤誕也)

中学年に所属する10~13歳の児童生徒は、ゴールデンエイジと呼ばれる時期にあり、この時期は一生に一度だけ訪れ、あらゆる物事を短時間で覚えることのできる即座の習得時期である。

日常生活の中で身につける運動、つまり遊びを通じた経験から自然に身につく運動に多く触れること

が重要である。頭で考えて理解するよりも、実際に動いて体で覚えることから頭と体の神経回路を繋げる体験が不可欠となる。すぐにできる児童生徒と、何度かの繰り返しをしなければ動けない児童生徒の個人差は多少見られるが、それでも授業のウォーミングアップとしてのルーティーンに取り入れることで身につけることができる。(写真2)



写真2 ウォーミングアップ

例えば、両手両足を使った四足歩行では、同じ手足を出すのか、右手左足の様に手と足を交互に出すのかで戸惑っている児童も初めは多いが、一度自分の動きやすい方法に気づくと次からは考えるよりも先に動けるようになってくる。また、腕の曲げ伸ばしと足の開閉脚跳びを、腕と足のそれぞれのリズムを変えて行わせる動きでは、頭で考えて次の形を覚えようとするより、自分でリズムを数えながら何度も繰り返して動いて体で覚えることを自然に行っている場合が多い。これらの動きは巧緻性と言われ、強壯性、柔軟性とともにデンマーク体操の特性とされている。

誤った方法を身につけてしまうとその後は修正がしにくいともいわれるゴールデンエイジの時期には、プレゴールデンエイジで行ってきた基本運動をベースとし、筋力や柔軟性を向上させながら、神経回路への刺激を与えて巧みに自分の体を操るための複雑な課題に取り組ませたいと考える。その様にして多くの運動経験をさせ、生涯体育へ発展する全ての運動の基本を身につけさせる必要がある。

また、運動が楽しいと思える工夫も必要不可欠である。今回の研修では、ほとんどの授業でウォーミングアップ時から常に音楽に合わせた体ほぐしやアイズプレイング、ストレッチ、トレーニングが行

われていた。学生たちは自然に歌を口ずさみながら動き、自分たちで雰囲気作りを行い、気持ちを高めながらパフォーマンスの向上を目指していた。この様な面から、感性を伸ばし純粋に運動が楽しいと思えたり、さらにはチームワークを養いながら仲間と切磋琢磨することで、情緒豊かな人格形成へ繋がっている重要性が垣間見られた。

#### <高学年> (宮崎純子・中村麻衣)

高学年に所属する 14~17 歳の生徒はポストゴールデンエイジの時期であり、身体全体や部分的な成長が急激に起こることでバランスを崩し、運動においても習得した技術が一時的にできなくなる時期といわれている。

思春期の発達(生殖器官、脳神経の発達による心の成長)が急速なこの年代では体に表れる変化が大きく見られ、特に女子は運動することへの意欲の低下が出始めると考えられる。運動は好きだが実際に動くことを面倒に感じてしまったり、種目による好き嫌いの差も現れ始め、運動嫌い・運動離れのきっかけに繋がってしまいがちな年代だと言える。

この年代では、ゴールデンエイジで獲得したさまざまな運動能力をさらに伸ばすことよりも、体力を維持・向上させる指導が必要になる。女子の体力の向上はこの年代をピークとしそれ以降あまり伸びないと言われている。したがっていかにこのピークの状態を維持していくのが大きな課題となる。筋力や持久力、瞬発力、柔軟性といった一般的な体力である行動体力を維持しながら、免疫力や外部の環境の変化への適応力としての防衛体力も意識していかなくてはならない。

行動体力の要素の中でも、筋力を鍛えるような重い負荷の運動動作の習得や、呼吸器・循環器系の刺激となる持久系の運動がこの年代では重要となる。呼吸器官・循環器官の発達急進期でもあるため、負荷のかかる持久性の高い運動から心肺機能を高め、筋力を高めて維持する必要がある。

強壯性の運動動作の獲得と持久性に刺激を加えることのできるプログラムと同時に巧緻性や柔軟性の向上も目指したい。体力の向上のピークを迎えつつあるこの年代には、バランスの取れた指導が重要で



ある。

オレロップ体育アカデミーでは、マットやトランポリン、跳び箱などの器械運動中心のタンブリングの授業、グループで合わせてアクロバティックな動きをするチームジム、手具を使った体操、ダンスなどといった体操をメインとしたものから、球技やトレーニング、パルクール（写真 3）など、運動を基本とし体育を通じた人間形成を目指している。



写真 3 パルクール

やはり色々な意味でのバランスが必要とされていて、オレロップのウフェ校長が大切だと考えていることについて以下の点を挙げていた。（写真 4）

- ①調和のとれた人間であること
- ②自分の体そのものや、体の正しい状態を理解すること
- ③頭と体をつなげて理解をすること
- ④トレーニング方法の知識・理解



写真 4 Uffe 校長と中村さん

歴史とともに体操は変化を遂げながらも、自分の体を知って正しい使い方や状態を理解すること、そ

して「1人のオリンピック選手よりも99人の健康」という考えであるデンマーク体操を通じ、ポストゴールデンエイジの年代の生徒たちの心身や情緒面での育成を目指して行きたい。

#### <大学>（鈴木淳也）

今回の研修では、玉川大学の学生における体力の実態 1) から、強壮性や敏捷性、持久性を高める運動プログラム作成のため、資料収集を含めた調査を行った。大学生の18～22歳は、インディペンデントエイジと呼ばれ、身体的な完成期に近づき、精神的にも身体的にもバランスの取れた時期である。

そのような時期において、いかに学生達へ強壮性を主とした運動プログラムを与え、理論的な内容を理解しながら実践させることが大切である。また、玉川学園の体育祭では、各ディビジョンで集団体操を実施していることから、デンマーク体操の系統的な指導法を構築するため、授業ならびに施設の見学、補助法や実技を体験し、玉川学園の体育科教員へ還元することが課題であった。

まず、オレロップ体育アカデミーの授業の中では、古典的な基本体操は実践されておらず、準備体操・補強運動の動きに垣間見られるのみであった。ウフェ校長先生は、「体操の基本理念は変わらないが、時代に合った授業内容を担当教員が創意工夫しながら展開している。」と話していたように、タンブリングやダンス、パルクールなど、新しい形へ変化し続けている様子がみられた。それ以外にも、TRX（写真 5）やボクササイズなど、トレーニング系の実技授業も行われていた。



写真 5 TRX

強壮性や敏捷性、持久性といった体力要素を高め

る運動として、準備体操・補強運動の運動プログラムは非常に参考になる内容であった。運動時間は、約 20 分程度でルーティーンが決まっており、主運動につながる動きや怪我しないための姿勢づくりなどを意図した内容であった。例えば、ゆりかご、手押し車、馬跳びといった個人あるいはペアでの運動だけでなく、四つ這いの姿勢で押し相撲、体幹を締めた状態で走るなど、グループでゲーム性を含んだ運動もみられた。また、教師は、言葉での説明は非常に短く、学生は常に体を動かしている様子がみられた。いかに、短時間で運動量や運動強度を確保するか、大変参考になった。このような準備体操・補強運動を、健康教育の実技や体育祭の体操練習の前に導入するなど、実践していきたい。

指導法として印象に残っているのは、常に音楽をかけながら運動していたことである。準備体操の運動プログラムに応じて、音楽の曲調も変えていた。(写真 6)



写真 6 準備体操の様子

その他、映像装置を使用したフィードバック、バラエティーに富んだ教具（色々な形のマット、傾斜がつけられるマット）など、体操指導する上で必要な設備が充実していた。(写真 7・8)



写真 7 映像装置

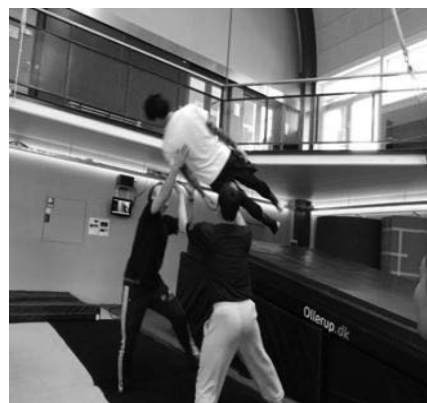


写真 8 傾斜のついたマット

小学校学習指導要領の「体づくり運動」の中でも、リズムに合わせて運動遊びする内容も含まれている。2) 授業に取り入れる際には、実際に指導する対象年齢や主運動につながる体操を考え、それに適した音楽を選択することが必要であろう。

また、ICT の利活用として映像装置を使用した授業は、日本の学校でも実践されている。オレロップ体育アカデミーでは、教師だけでなく一緒に練習している学生同士映像を見ながら、指導し合う様子がみられた。

新しい技ができた学生は、入り口にある鐘を鳴らし、体育館にいるすべての人が、その学生を賞賛する様子がみられた。改めて、映像を撮るだけでなく、運動した者に対して、どのようにフィードバックするか、その大切さを再認識させられた。

その他にも、運動プログラムに競争性やゲーム性を含ませ、学生たちは自ら進んで運動を実践し、楽しんでいる様子がみられた。また、学生だけでなく教師も常に運動を「楽しむ」姿がみられ、非常に参

考になった。

今後は、デンマークの児童や学生などの体力レベルを比較しながら、どのような体力要素が劣っているのか調べるとともに、日本人に合った指導法やトレーニングプログラムなどを構築していきたい。

#### 4. 研究②

##### 「フォルケホイスコーレであるオレロップ体育アカデミーとデンマークの教育制度及び教員養成についての研究」(文末資料)

<目的>

オレロップ体育アカデミーでの体操の指導法・補助法及びスポーツに関する指導法を研究するにあたり、①デンマークの教育思想や経緯等を整理する、②デンマーク独特の教育制度と教員養成制度およびフォルケホイスコーレの意義を理解することである。

日本とデンマークの教育制度や教員養成制度は大きく異なり、デンマークの根底には N・Grundtvig や C・Kold の教育思想が反映されている。デンマーク国内には、独自性が高い私立学校のフォルケホイスコーレが約 90 校あり、オレロップ体育アカデミーは体操中心のフォルケホイスコーレである。

フォルケホイスコーレの特徴は、①試験をしない。単位や資格の付与もない。②教師と学生が寮で共同生活する。③書物よりも対話を中心に生そのものを学び、社会性を自覚するという。④18 歳以上なら性別、年齢、障がいの有無、国籍を問わず、誰でも入学可能である。⑤技術や知識を習得することが主眼ではなく、授業や討論、実践、実習、生活を通して、自己発見をし、これから生きる自分の道を探すことに力点が置かれている。

フォルケホイスコーレの修学期間は 3～6 ヶ月であり、オレロップ体育アカデミーでは、4 ヶ月コース(9月～12月)と6ヵ月コース(1月～6月)がある。学生によっては4ヵ月コースと6ヵ月コースを継続して10ヵ月間を受講する者もいる。(工藤亘)

#### 5. オレロップ体育アカデミーとの交流と今後の展望

1. 本学とオレロップ体育アカデミーの教員相互の研

修や留学はこれまでも実施してきたが、その頻度を上げることで研鑽の機会を増やし、実践と研究成果の統合を試みたい。

2. 大学生(デンマーク体操部・保健体育専攻等)の短期留学の機会はあるが、長期留学を視野に入れ、カリキュラムの中に位置づけ、学生の国際的な学びの機会を増設したい。また、オーストリアでのスキー実習や欧米諸国等のスポーツと関連させたダイナミックなプログラム開発を試みたい。

3. K-12 の子ども達もオレロップ体育アカデミーで短期留学ができるプログラムを構築し、国際教育の一環としてみたい。またオレロップ体育アカデミーには、幼児や児童が安全に体操や転回運動ができるピットや設備等があり、基本的な運動能力の向上や運動習慣の定着に寄与しているため、本学にも同様の施設があることが望ましい。スヴェンボアのスポーツ複合施設(SG Huset)は非常に素晴らしい施設であり、体育施設の参考にすべきである。(写真9)



写真9 スヴェンボアのスポーツ複合施設(SG Huset)

4. 本学とオレロップ体育アカデミーの INTAC(国際教育学級)が持っているネットワークをつなぎ、両校が健康・スポーツを通じた国際交流や研究の拠点となる可能性を模索してみたい。

5. オレロップ体育アカデミーは 2020 年に設立 100 周年を迎え、本学も 2029 年には設立 100 周年を迎え



る。これまで構築してきたお互いの関係性をより深め、長期的・安定的・発展的・開発的な関係の構築をしていくことが子ども達の未来に貢献することだと信じている。(工藤 亘)

参考文献

- 1) 工藤 亘, 鈴木 淳也, 河野 峻平, 小林 潤, 宮崎 純子, 大澤 誕也, 中村 麻衣: 玉川大学・玉川学園の子どもたちの体力の現状を基にしたオレロップ体育アカデミーでの研修課題の探究, 玉川学園・玉川大学健康・スポーツ科学研究紀要 18, pp. 19-23, 2018 年.
- 2) 文部科学省: 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説体育編, 東洋館出版社, 2018 年.

資料 「デンマークの教育制度及び教員養成」

デンマークの教育制度と  
教員養成について



1867年: 修好通商航海条約締結

オレロップ研修チーム研究資料  
工藤 亘

年齢	学生	教育機関	備考
27	20		
26	19		
25	18	大学	
24	17		
23	16		
22	15		
21	14	大学(仏語)	カレッジ(無料)
20	13		
19	12		
18	11	ギムナジウム	カレッジ(無料)
17	10		
16	9		
15	8		
14	7		
13	6		
12	5		
11	4	総合制電機数値学校 フォルケスコレ(公立小中学校)	
10	3		
9	2		
8	1		
7	0		
6	0		
5			
4			
3			

デンマークの  
学校系統

フォルケオプリュスニング

(民衆の社会的自覚)

清水満「改訂新版」生のための学校」新評社、2007年 p.62

• グルトヴィの教育思想に基づく

デンマークの3つの教育制度

①国民教育(義務教育)

②研究準備教育

③職業準備教育

「人々が対話と相互作用を通じて、共同性・歴史性に  
目覚め、人間の生の不可思議さ、尊厳を知り、  
皆と共に力を合せて生きること覚醒し、自覚する」

\* フォルケ: 国民・民衆

N・F・S・Grundtvig (1783-1872)

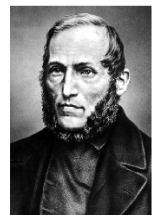
- デンマーク近代教育の父
- デンマークの成人教育において重要な役割を担った人物。
- 北欧神話の学者・神学者・詩人教育思想家。
- 現在でも彼の携わった讃美歌はデンマークの教会中で歌われている。
- デンマーク教育省による分類で、自由成人教育に位置付けられている Folkehøjskole という全寮制の学習機関の教育思想を構想とした人物。



Christen Mikkelsen Kold (1816-1870)

クリステン・コル、清水満編訳「コルの「子どもの学校論」」新評論、2007年、p.190

- デンマーク独自の民衆の口頭教育と対抗教育の創始者の一人。
- 近代の公教育に大きな影響を与えた人物。
- コルが著した「子どもの学校論」はデンマークの教員養成大学で必読書!
- 口頭教育の学校や公立学校の教育指針となっている。
- Friskoleの創始者。
- Efterskoleの協働創始者。





## イドラット(idræt)

清水満「改訂新版」生のための学校」新評論、2007年、p.30

- ・イドラット(idræt)：デンマーク語は独特の歴史的背景をもち、外国語には翻訳不可能。
- ・北欧の独自の身体観、体育観があり、idrætという言葉に込められている。
- ・誰もが体を動かすことは楽しく、心の解放であるはずなのに、体育やスポーツの目的が、『より速く、高く、強く』になり、勝ち負けを決めて、人々の潜在的な運動能力を引き出すようになった。

「自己の身体をいかにのびのびと健康にさせ、自由にするか、いかに美しく身体運動をするか」

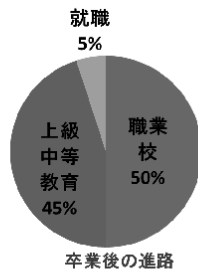


この思想が現れたもの『デンマーク体操』

## 総合制義務教育学校 フォルケスコーレ

清水満「改訂新版」生のための学校」新評論、2007年、p.69  
児玉珠美「デンマークの教育を支える「声の文化」」新評論、2016年、p.70

- ・義務教育：6歳～16歳\*2009年より
- ・初等教育と下級中級教育を一緒にした公的教育システム
- ・平均：児童20人/教師1人 上限28人
- ・教材は教師が自由に選択
- ・カリキュラムのガイドラインは政府指定だが、実際の運用は、教師と保護者との会議で決める
- ・10年間の義務教育後、半数以上は卒業。任意で10学年へ進級する場合もある。
- ・コムーネ(市に相当)官掌



## フォルケスコーレ必修科目

科目群	科目名	対象学年
人文系科目	デンマーク語	全学年
	キリスト教	全学年
	英語	1～9学年
	歴史	3～9学年
	社会	8～9学年
クリエイティブ系科目	スポーツ	全学年
	音楽	0～6学年
	美術	0～5学年
	木工・手芸・家庭のいづれか一つ	4～7学年
科学系科目	数学	全学年
	自然科学	0～6学年
	地理	7～9学年
	生物	7～9学年
	物理および化学	7～9学年
特別科目	交通安全	
	健康と性教育	
選択外国語	職業体験	
	ドイツ語	5～9学年
	フランス語	5～9学年

\*ITとメディア、インベーションと起業、言語発達等、複合領域における科目も新設されている。2014年、「毎日何らかの運動を授業に加えること」が義務化されている。

出典「児玉珠美」デンマークの教育を支える「声の文化」新評論、2016年、p.73に筆者加工。

## 義務教育の最終試験

児玉珠美「デンマークの教育を支える「声の文化」」新評論、2016年、p.168

- ・口頭試験実施が法的に義務付けられている
- ・義務教育終了資格の取得  
進学のための試験 (Fokleskolens afsluttende prøver)
- ・義務教育の最終段階：9学年or10学年
- ・筆記試験、口述試験、プロジェクトベースの課題等を含め多数の査定方法使用。

<必修試験科目>

デンマーク語、英語、数学、物理学/化学(選択)

フランス語/ドイツ語(選択)、歴史社会、

人文科学と科学(地理と生物学)の

主要な学習領域からランダムに選択

## 後期中等教育学校 ギムナジウム

[https://www.gikai.metro.tokyo.jp/images/pdf/oversea/2101\\_3.pdf](https://www.gikai.metro.tokyo.jp/images/pdf/oversea/2101_3.pdf)

- ・一般的な上級中等教育の中で、日本の普通科高校に相当するのが「ギムナジウム」
- ・3年間の過程
- ・国内に約150校
- ・カリキュラム「語学コース」と「数学コース」の2つ
- ・大学進学準備をする学生と同様の一般教養をうけられることが目的
- ・3年後終了試験(大学入学資格試験)を経て大学へ
- ・アムト(県に相当)が管掌

## 大学

清水満「改訂新版」生のための学校」新評論、2007年、p.72

- ・5年制
- ・医者、教師、学者、法曹関係者、エンジニアなどの専門職養成の場
- ・総合大学  
コペンハーゲン、オーフス、オーデンセ
- ・大学センター  
ロスキレ、オールボー
- ・単科大学  
各地に工科大学、教員養成大学

## フリースコーレ

清水満「[改訂新版]生のための学校」新評論、2007年、p.254

- 私立の小・中学校 約20%以上が通う
- フォルケホイスコーレ運動の中で生まれた
- 1クラス平均11名
- 授業科目やカリキュラムの自由度が高い
- 音楽、美術、陶芸、木工・金工、染め物、ダンス、身体表現、演劇、体操などを重視
- 教科書は各教員が決める
- 教師は一定期間学校を離れ、担当科目(3科目)の研修ができる(大学・フォルケホイスコーレ・デンマーク教員ホイスコーレ:教師のための研修機関)
- 担当クラスは持ち上がり
- 原則:試験はない
- 卒業時に義務教育課程の終了を証明する国家試験を行う

## フリースコーレの特徴

清水満「[改訂新版]生のための学校」新評論、2007年、p.253

- ①就学義務がなく、自分で学ぶ権利がある
- ②中学1年まで試験を禁止している
- ③1クラス28名以下と法律で定められており、  
全国平均では1クラス19名(1994年)
- ④公立学校の教育に不満があったり、  
公立学校が合理化で閉鎖された時、  
自分達で私立学校をつくってよい
- ⑤行政は、この私立学校の経費の75%を補助  
しなければならない
- ⑥私立学校の教員は教員資格がなくても構わず、  
普通の人でもなれる
- ⑦転校は自由。学区制はない
- ⑧公立学校、私立学校とも理事会が運営する。  
公立学校の場合、通常12名の理事会に2名の  
生徒代表の委員の参加が義務付けられている
- ⑨第10学年があり、自分の意志で義務教育機関を  
10年にできる  
半数以上の子どもが第10学年に進級している
- ⑩公立、私立を問わず、放課後小学校4年生までの  
児童が集う施設をもつ専任教員がおり、  
親が迎えに来るまで預かる

## エフタースコーレ

清水満「[改訂新版]生のための学校」新評論、2007年、p.260

- 義務教育段階の第8学年と第9学年  
(日本の中2・3年)と第10学年の生徒が通う  
全寮制の中学
- 思春期の生徒対象
- 1クラス10名程度
- 生徒の自主性の尊重
- 週に1度、全生徒と全教員の会議がある

## フォルケホイスコーレ

清水満「[改訂新版]生のための学校」新評論、2007年、p.21

特徴

- 試験をせず、単位や資格の付与もない。
- 教師と学生が寮で共同生活。
- 書物よりも対話を中心に生そのものを学び、社会性を自覚するということ。
- 18歳以上なら性別、年齢、障がいの有無、  
国籍を問わず、誰でも入学可能。
- 技術や知識を習得することが主眼ではなく、  
授業や討論、実践、実習、生活を通して、自己発見  
をし、これから生きる自分の道を探すことに力点。

## Gymnastikhøjskolen i Ollerup の教員になるには・・・

- 教員免許の資格が必要条件ではないが、  
有利になることは確実。

<条件>

- ①専門の科目を教える技量があること。
- ②専門の科目をデンマーク語と英語で  
教えることができること。
- ③人間性(面接あり)

中村秀峰さんからの返信(2017年6月12日)

## Helge Fisker先生

- 2009-2013年  
デンマーク回転運動安全委員
- DGI回転運動委員、  
シニア全国チームのコーチなど  
(Danske Gymnastik & Idrætsforeninger)  
デンマーク体操・スポーツ協会
- オレロップ・チーム・ジムコーチとして  
全国優勝多数。
- 北欧と欧州選手権でも上位の成績。



留学時から  
親交を深め  
ています！

## 教員の身分・資格

日本教育大学協会『世界の教員養成Ⅱ 欧米オセアニア編』学文社、2005年、p.107

- 「グループ契約による自治体雇用の身分」
- 校長だけ、公務員身分
- 教員資格の種類
- ①就学前教育教員 養成カリキュラムは短期(1~3年課程)
- ②義務教育学校教員
- ③後期中等教育学校教員
- ④職業教育学校教員

## フォルケスコレ教員の養成

日本教育大学協会『世界の教員養成Ⅱ 欧米オセアニア編』学文社、2005年、p.108

教員免許取得には、

- 4年制の義務教育学校教員養成課程、  
あるいは教育省認定の養成プログラム修了
- 4年制の教員養成課程を置く教員養成カリキュラム:  
18か所(「中期」の非大学型高等教育機関)

入学要件:

高等教育準備試験もしくは  
それに相当する試験に合格すること

## フォルケスコレ教員の養成教育課程

日本教育大学協会『世界の教員養成Ⅱ 欧米オセアニア編』学文社、2005年、p.108

- 1.キリスト教研究/生活の哲学
- 2.主教科 デンマーク語 or 数学(両方の選択可)
- 3.3つの選択主教科  
人文教科群・自然科学教科群・実技/芸術教科群
- 4.いずれかの主教科に関連する課題研究
- 5.教育学、教授学、心理学、教育理論、社会  
の中の教育など
- 6.教育実習(24週間)  
\* 4教科担当が前提  
\* 各教科に関する評価は外部試験

## 後期中等教育学校ギムナジウム教員の養成

日本教育大学協会『世界の教員養成Ⅱ 欧米オセアニア編』学文社、2005年、p.111

- ギムナジウム教員免許取得コース  
= ペダゴギウム(学位取得後付加型養成制度)  
理論過程と実地指導過程から構成

理論過程:

南デンマーク大学の後期中等教育インスティテュート  
実地指導過程:

各ギムナジウムで実施(5ヵ月間、大学の関与なし)

\* 高等教育カテゴリー「長期」に位置付けられる大学の  
学士課程を卒業した上で、ギムナジウム教員免許  
取得コースを修了することが必須(5年間が標準)

- 養成コースへの入学要件  
中等教育カリキュラムを構成する  
一つないし複数の教科に関する学位を  
持たなければならない。
- 教科領域  
デンマーク語・物理学・歴史学・体育とスポーツ学  
数学・音楽・古典研究・技術学など
- 養成コース志願者は後期中等教育段階の学校に  
おいて試補資格(実習生としての特別資格)を  
取っておく必要がある。
- 修了後のギムナジウム配置は教育省が決める

## ギムナジウム教員の養成教育課程

日本教育大学協会『世界の教員養成Ⅱ 欧米オセアニア編』学文社、2005年、p.112

- 実地指導過程: 実践を通じて教育指導の計画、実施、評価の技能や力量を身に付ける  
担当クラスの教員が指導教員
- 理論過程: 教育学コースと教科教育コース
- 教育学コース: 4～5日間の2回のモジュール
- ①養成コース初期段階、②実地指導過程終了後
- 教科教育コース: 3～4日間の短期集中形態  
教育学コースの①モジュールに続いて配置  
教育学コース(①養成コース初期段階)⇒教科教育コース



1931年、Bukh氏来日



(團長川玉) 初編入の石一光クラブ



## 人事・勤務条件

日本教育大学協会『世界の教員養成Ⅱ 欧米オセアニア編』学文社、2005年、p.114

- フォルケスコーレ・ギムナジウムはほぼ同様
- 定年: 67歳
- 採用: 空定員が生じた時に公募
- 教員人事
- 異動の制度はない
- 年間勤務時間: 1924時間
- 週37時間勤務、年間勤務日209日
- 休暇法により年間5週間(3週間は連続)保障
- 子育て休暇: 1歳以下は最低8週～最大26週



資料 オレロップア体育カデミーでのスケジュール

	3月19日	3月20日	3月21日	3月22日	3月23日	3月24日
主な活動	・成田出発⇒コペンハーゲン到着 ・バスで移動⇒オレロップ体育アカデミー着 ・ウフェ校長に挨拶 ・スタッフと打ち合わせ	・校内見学 ・【講義】オレロップと玉川学園の歴史について (ウフェ校長) ・【実技】転回補助法・安全指導 (ヘリエ先生) ・ニルス・ブックの墓参	・【実技】リズム体操、チームジムタンブリング ・【講義】オレロップフリースコーレについて (小中学校訪問) ・【実技】転回補助法・安全指導 (ヘリエ先生) ・【実技】パワータンブリング、ダンスフィットネス、バルクール	・【講義】ニルス・ブックについて (ウフェ校長) ・【実技】アート・シェアリング ・【講義】オレロップ体育アカデミーの現状と国際交流について (クリスチアネ先生) ・【実技】リズム体操、チームジムタンブリング	・【実技】パワータンブリング、ダンスフィットネス、バルクール ・【実技】TRXトレーニング (ヘリエ先生) ・【講義】オレロップ体育アカデミーと玉川学園の今後の交流について (ウフェ校長) ・高井久光氏と懇談会	・【実技】特別授業 補助法・安全指導 (ヘリエ先生) ・スウェンボア地区のスポーツ複合施設 SG Husset視察 (ヘリエ先生)
	3月25日 ・コペンハーゲンへ移動(DGIホテル)	3月26日～27日 26日: デンマーク出発 27日: 成田到着				